

文献紹介

太田 孝編著・西川 治監修：

『幕末以降市町村名変遷系統図総覧』

東洋書林 (1巻) 1995年8月

B5判 874ページ 28,840円

(2巻) 1995年11月

B5判 899ページ 28,840円

『幕末以降全国市町村名検索辞典』

東洋書林 1996年2月

B5判 749ページ 39,140円

市町村名の変遷を系統図にした『幕末以降市町村名変遷系統図総覧』は1巻が北海道一岐阜県、2巻が静岡県一沖縄県で、全市町村(約10万項目)の索引が『幕末以降全国市町村名検索辞典』である。

「江戸時代の幕藩体制下の町村の数は7万数千に及んだといわれている。(中略)明治21年4月に市制町村制が公布され、翌22年4月から実施に移り、23年2月までに完了した。その結果、それまでの町村の多くは合併され、新市町村の下に再編成され、今までの町村名の大部分は新市町村の大字の名となったのである。」(『総覧』1巻の序)。また明治22年の新町村名は、戦後の合併(町村合併促進法、1953年10月施行)によって大半が消滅し、市役所・町村役場の支所名、小学校名などに名をとどめるくらいで、記憶から遠ざかりつつあるといわれる(井戸庄三「明治22年新町村名の研究」, 地理学評論49-5号, 1976年)。このような新旧の町村の変遷をまとめたのが本書である。ちなみに市町村数の推移は次の通りである(1996年は筆者算出)。

1890年： 40市, 713町, 12,591村

1940年： 178市, 1,706町, 9,614村

1955年： 490市, 1,854町, 2,468村

1996年： 668市, 1,994町, 571村

編著者は1991年にワープロ印字で『全国市町村変遷一覧』を完成させた。これは市制・町村制実施時を出発点にしたもので、さらに、幕末以降明治22年までの変化を別冊で作成していた(この期間に関しては福島、新潟、長野、岐阜、愛知、兵庫、岡山、熊本、大分県で町村の変動があった)。今回の編著は、『全国市町村変遷一覧』に、別冊の内容を取り込み作成されたものである。

本書の系統図は現行市町村が一単位で、自治省の

コード番号に従い、各県内でおおよそ市制施行順、郡別に並んでいる。縦方向に市町村の変遷が続き、横方向に合併前の町村がつながっている。幕末から明治22年までの変動は図の終わりに別掲されている。また本書では全市町村にフリガナが付いているが、これは内務省や自治省の資料で調べたものという。

表現方法としては系統図の線のつながり方の違いで、A町がB村・C村を合併、A村・B村が合併してC村になる、A町・B町が合併して市制施行、A村を編入……などを区別している。用語は凡例に次のようにある。分割：一部を分離すること、分割設定：一部を分割し新しい町村を設置すること、分立：独立して設置された新しい町村をいう。

本書と同じ形には表現できないが、系統図の様子が伝わるように例示してみる。年月日の位置を変え、ルビ、郡名を省略し、旧字体は新字体にした。

【茨城県土浦市】

土浦町

←中家村=上高津村・中高津村・下高津村・小松村・佐野子村・飯田村・矢作村・宍塚村・粕毛村 昭12.4.1

←藤沢村の一部=虫掛村 昭和13.6.1

←東村=中村・乙戸村・永国村・中村西根・摩利山新田・右靱村・烏山村・小岩田村・大岩田村 昭14.6.1

真鍋町=真鍋村・殿里村・木田余村

土浦市 昭15.11.3

←都和村=常名村・中貫村・今泉村・小山崎村、朝日村の一部=沖新田、荒川本郷の一部、荒川沖の一部 昭23.9.1

←上大津村=手野村・白鳥村・田村・沖宿村・菅谷村・神立村 昭29.11.1

この例は、土浦町が中家村、藤沢村虫掛、東村を編入、昭和15年に土浦町と真鍋町が合併して土浦市、さらに都和村、朝日村沖新田・荒川本郷・荒川沖を編入、上大津村を編入した経過を示している。現市域の変遷が縦方向に続き、町村制によって成立した町村が太い線で囲まれ(上記では下線)、それ以前の村が横方向に細い線(上記では=や・)で示されている。

『検索辞典』は『総覧』の五十音順索引で、次の

ように、市町村名と、現在の県名、市名または郡名、ページ数を載せている。1巻と2巻は通しページで、同名・同漢字のときは市・村・町の順で記載されている。

佐貫村（茨城・竜ヶ崎市）	276
佐貫村（栃木・塩谷郡）	330
佐貫村（群馬・邑楽郡）	362
佐貫村（千葉・長生郡）	450
佐貫村（鳥取・八頭郡）	1274
佐貫町（千葉・富津市）	436
散岐村（鳥取・八頭郡）	1274
佐貫谷村（兵庫・多紀郡）	1199
佐沼村（茨城・竜ヶ崎市）	276
佐沼町（宮城・登米郡）	148

しかし、市・村・町の順番を市・町・村にした方が使いやすく、また、町村段階まで分かれば『検索辞典』単体での利用範囲が広がると思う。そこで上記の内容を町・村の順に配列し直し、郡名を町村名にして、成立年と消滅年も入れて例示すると以下のようになる。

佐貫町（千葉・富津市）	→昭30
佐貫村（茨城・竜ヶ崎市）	→明22
佐貫村（栃木・塩谷町）	→明22
佐貫村（群馬・明和村）	明22→昭30
佐貫村（千葉・睦沢町）	→明22
佐貫村（鳥取・河原町）	→大6
散岐村（鳥取・河原町）	大6→昭30
佐貫谷村（兵庫・篠山町）	→明22
佐沼町（宮城・迫町）	明22→昭30
佐沼村（茨城・竜ヶ崎市）	明19→明22

さらに町村制による行政村と、それまでの村を、符号で区別するとわかりやすいかもしれない。また本書によれば、市制・町村制が実施される前は東京市1,400町、京都市2,000町、大阪市520町、金沢市530町など、江戸時代の市街地の町名が数えられているが、これらの町は町村制による町とは質を異にしており、何らかの符号で区別する方がわかりやすい。

本書からわかることを佐沼村を例に示してみる。『検索辞典』で佐沼村を引くと現在竜ヶ崎市とわかり、『総覧』によると佐沼村は明治19年に竜ヶ崎町から分立し、明治22年に大徳村・宮淵村と合併して大宮村となり、昭和29年に竜ヶ崎市の一部となったことがわかる。本誌153号（1991年）の本欄で取り上げ、その後も版を重ねている東京堂出版『市町村名

変遷辞典』では、検索できるのは町村制による行政村（この例では大宮村）までで、大宮村の基になった佐沼村・大徳村・宮淵村については検索することができなかった。

つづいて、前稿（153号）で詳述した茨城県河内村（今年5月から河内町）を本稿でも取り上げ、本書の内容を紹介したい。

河内村は、次のように、生板村・源清田村・長竿村が合併して成立し、さらに金江津村を編入した。町域には、瑞穂村という村が昭和17年から25年まで存在していた。また明治32年に、千葉県香取郡であった金江津村と同村に編入された印旛郡豊住村田川は茨城県に移管された。

【茨城県稲敷郡河内町】

生板村 = 生板村・幸谷村・生板鍋子新田・竜ヶ崎町歩・小林町歩・大徳鍋子新田・角崎町歩

源清田村 = 源清田村・手栗村・羽子騎村・猿島新田・宮淵鍋子新田・古河林村・平三郎町歩・布鎌町歩

長竿村 = 長竿村・庄布川村・下町歩・兵部新田
瑞穂村 ← 源清田村・長竿村 昭17.8.1

源清田村（瑞穂村から分立） 昭24.8.1

長竿村（瑞穂村が名称変更） 昭25.11.3

河内村 昭30.5.3

← 金江津村 昭33.2.15

河内町 平8.5.1

大徳鍋子新田—鍋子原野を開拓 明4

金江津村（千葉県香取郡→稲敷郡 明32.4.1）

= 金江津村・片巻村・下加納新田・平川村・十三間戸村

← 千葉県豊住村（下埴生郡→印旛郡 明30.4.1）
の一部 = 田川村 明32.4.1

生板村・源清田村・長竿村は明29. 3. 29に郡の再編で河内郡から稲敷郡

『幕末以降市町村名変遷系統図総覧』では、現市町村域にどんな旧市町村が含まれ、どういう変遷をしてきたのかがわかり、『幕末以降全国市町村名検索辞典』では、各市町村が現在属する市名または郡名がわかるしくみになっている。町村制による行政村だけでなく、行政村の基になった村も検索できることが本書の特色となっており、この欄で本書を紹介する理由である。

（飯島 通明）